

## 人が独りでいるのは良くない

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

創世記2章18節

私が生まれ、そして今また住んでいる札幌は、日本の近代プロテスタントの発祥の地のひとつとして知られています。明治の初め、札幌農学校に赴任したクラーク博士が、一年にも満たない間に学生たちに鮮烈な影響を与え、信仰の灯をともしていきました。

こんなエピソードが伝えられています。学校当局が、学生たちの生活を管理するため詳細な規則の案を作りました。ところがクラークは「規則はただ一つ、“Be Gentleman (紳士たれ)” で足りる」と、学生たちの主体性に信頼する姿勢を示し、そして聖書を教え、信仰に基づく主体性を育てることとしたのです。学生たちは感激して、みずから進んで生活を整えていったといえます。

江戸時代の終焉から十年にもならない当時、クラークと出会った十代の若者たちにとって決定的であったのは、博士によって「個人」としての自分を発見した、ということでした。人間の価値が、身分や家、主従関係や土地の人間関係といった古い共同体の中で定められていた時代に育った彼らに、クラークは、神の前にひとりの人間として立つ「個人」としての価値を教えてくださいました。

### <共同体からの解放>

この札幌での例に端的に示されるように、プロテスタントの信仰は、日本人の内面に「個人」という近代精神をもたらしたと言えます。明治から戦後に至るまで、プロテスタント・キリスト教は、近代日本社会の中で「個人主義」と親和性のある教えと理解されてきました。教会に加わり礼拝に出席することは、熱心に説教を聞き聖書を学ぶことで自分自身をひとりの信仰者として高め作り上げていく「修養」と受けとめられ、クリスチャンといえ、高い倫理性をもって清く正しく生きる個人というイメージが定着していきます。戦後のいわゆる「キリスト教ブーム」の時代もまた、それまでの「封建的」束縛からの個人の解放をもたらすものとしてキリスト教が歓迎されたといえるでしょう。

ところが、戦後の高度経済成長にともなう社会の大きな変革は、古い共同体そのものの変容・崩壊をもたらしました。かつての共同体が与えて(押しつけて)きていた、地縁・血縁による人とのつながりを、私たちはもはや失ってしまっているのです。

前任地の旭川では、教会幼稚園の園長も兼ねていましたが、毎年、親の会でお話をする際、二つの質問をしていました。ひとつは「赤ちゃんのおむつを換える、ミルクを飲ませる、寝かしつける、という三つの世話を、初めて経験したのはあなたが何歳のときでしたか」、もうひとつは「あなたには、家庭や個人的なことを相談できる十歳年上の友人がいますか。また、十歳年下の友人から進路や友人関係などについて相談されることがありますか」というものです。二十代、三十代の親たちのうち、十八歳までに赤ちゃんと触れ合った経験をもつ人は、年々少なくなっていました。最近では、圧倒的多数の親たちが、初めて赤ちゃんの世話を体験したのは自分の子が生まれてからと答えます。つまり、ぶっつけ本番で親になっているのです。そういう親たちは、違う世代とのくつろいだ深い関係を、ほとんど経験していないのです。人と人との関係が、いかに貧しく乏しくなっているか、如実に示されています。

私の妹はインドネシア人と結婚してジャカルタに住んでいます。以前、妹の家を訪ねた際、親戚一同で歓迎の席を設けてくれました。たくさんの人々が集まった中、妹の夫の兄の妻の妹の婚約者、という人までもが「We are Family! (ぼくらは家族だ)」と握手してくれたのにはさすがに驚きました。けれども、かつては日本でも、血縁に基づくそのような大きな共同体が息づき、ゆたかな人間関係が織り成されていたのではないのでしょうか。

「昭和」ブームが言われます。映画の世界でも、『ALWAYS三丁目の夕日』の横丁、『フラガール』の炭鉱の街、あるいは定番の『男はつらいよ』シリーズの浅草の下町など、地縁による関係もまた、今や束縛としてではなく人を支える懐かしいきずなとして思い起こされる時代なのです。

今や、血縁・地縁による古い共同体は力を失い、私たちはむきだしの個人として社会に置かれています。しかし、その中で私たちは、個人の解放の喜びより、むしろ個人主義のもたらす孤独と孤立、そして不安と寂しさを味わい、かつての共同体のきずなを懐かしんでさえいます。「個人」の価値を教えてきたキリスト教は、結局、私たちをこういう孤独と寂しさへと導くものだったのでしょうか。

#### <共同体を形成する信仰>

今、あらためて聖書を読んでみると、聖書は人間を神の前にひとり立つ個人として示しているには違いないのですが、また同時に、人間は神によって互いに結びあわせられ、共に生きる共同体を形作るものと示していることに気付かされるのです。

そもそも、神が人間をどのように創造したかを物語る創世記の2章18節に「人が独りでいるのは良くない」という人間理解が記されています。神ご自身がこのように認め、そして、人にふさわしいパートナーを備えることとされたのです。これはつまり、「人は独りで生きるものではない」「人は本来、他者と共に生きるもの、他者との関係の中の存在なのだ」ということではないのでしょうか。

この箇所は、しばしば結婚の起源として読まれます。しかし、それだけでは、かえって聖書の深い含意を損なうことになるでしょう。むしろ、夫婦を最小の共同体の例と理解し、結婚は

新しい共同体の形成を意味すると受けとめたとき、このことばの意味がゆたかに広がっていくのです。

長い間、「個人主義」の宗教として受けとめられてきたキリスト教ですが、実は、聖書は、信仰が共同体を形成する力であることをとうとうと物語っているのです。

旧約聖書は、「出エジプト」という神の救いのできごとの中で、モーセを通じて律法を与えられた人々が、新しい共同体、「神の民」イスラエルを形成していく壮大な歴史をたどっているのです。

新約聖書では、「神の民」は、もはや律法ではなくイエス・キリストの福音に基づいて形成される、「教会」という新しい共同体として示されます。イエス・キリストの福音もまた、創世記と同じように「人は独りではない。独りで生きるものではない」とのメッセージを、不可欠に含むものでした。

マタイによる福音書は、主イエスの誕生の意味を、「インマヌエル＝神は我々と共におられる」ということばで示しています（1章23節）。神が共におられるから、私たちは独りではない、孤独ではない、というのです。そして、神が共にいてくださるということは、人と人と共に生きることに直結すると、聖書は教えます。神と人とを結ぶ愛は、即、人と人との間の愛として現れます。神との新しい関係、信仰は、人と人との新しい関係を開き、新しい共同体の形成をもたらすのです。

現実に、使徒パウロなどの伝道活動は、当時勃興しつつあったローマ帝国の諸都市に、それまでの古い共同体を離れて集まってきていた人々の新しい生の場として、教会という新しい共同体を形作るものでした。教会という信仰の共同体は、けっして観念的な意味ではなく、まさしく人々の生活を支える場として形作られていったのです。

今日の日本の社会でも、キリスト教信仰は、共同体を形成する力を決して失ったわけではありません。むしろ、古い共同体が力を失った今、信仰にこそ、人間が共に生きる場を、人がいきいきと結びあう関係を、産み出す希望が残されているのです。

東京の下町のある教会の牧師から、こんな話を聞きました。その教会では、毎年、東京の西郊の山の中で、一泊の修養会をすることにしています。おとなも子どもも一緒に電車に乗って、遠足気分ワクワクとでかける途中、乗り換え駅のホームの売店のおばさんが、「あのう、皆さん、いったいどういう団体なんですか？」と不思議そうに聞いてきたというのです。毎日駅で何千人もの客を見ている目にも、数十人の老若男女が和気あいあいと楽しげな集団は、まったく見慣れないものだったのでしょう。教会は、この現代社会において、新しい共同体としての可能性を秘めています。信仰は、そういう新しい共同体を作る力なのです。

「人が独りでいるのは良くない」というのは、聖書の深い人間理解です。神は、人間に、個人としての尊厳を与えると共に、そのような個人が、いきいきと共に生きる共同体を形作るよると呼びかけています。その声に応える道を追い求めていきたいと思うのです。